# 岩屋後古墳 IWAYAATO

発掘調査概報

島根県教育委員会

## 例言

- 1. 本書は昭和52年度におこなった岩屋後古墳発掘調査の概報である。
- 2. 遺跡は昭和45年10月27日付で県指定史跡となっており、同時に周辺の公有地化もなされている。しかし風化等による自然消滅の可能性も出てきたため、復原整備計画をたてる上での基礎資料を得ることを目的として国庫補助を得て調査を実施したものである。
- 3. 調查組織

調査主体	島根県教育委員会				
調査指導	島根県文化財保護審議会委員	Ш	本		清
	同 奈良国立文化財研究所技官	町	田		章
調査員	島根県教育委員会文化課係長	蓮	岡	法	瞕
	同 主事	横	Щ	純	夫
	同	1	部	吉	博
	八雲立つ風土記の丘資料館臨時職員	平	野	芳	英
調査補助員	明治大学学生	井	上	寛	光
	島根大学学生	石	飛	公	士
調査協力	出雲玉作資料館学芸員	勝	部		衛
調査期間	昭和 52 年 10 月 20 日~同年 12 月 27 日				

- 4. 発掘調査に際して、地元有部落の方々、および八雲立つ風土記の丘資料館職員の方々には終始献身的な協力を賜った。また東出雲町在住の遠藤紀美子女史には実測図面の整理、浄書等諸諸にわたって援助していただいた。厚く感謝の意を表したい。
- 5. 本書中の高さはいずれも海抜高である。
- 6. 本書挿図中、第9・10図に掲載した埴輪はいずれも東京国立博物館の所蔵にかかるものである。
- 7. そのうち、第9図の埴輪実測図については故近藤正氏が生前作成されたものを加代子未亡人の御厚意により掲載させていただくものである。
- 8. 出土遺物のうち皮袋形須恵器について、奈良県立橿原考古学研究所所員千賀久氏および鳥取県教育委員会文化課主事清水真一氏から有益な御教示をいただいた。記して厚く謝意を表したい。
- 9. 本書の編集・執筆は上記調査員のうち横山、卜部、平野の3名が協同して行なった。

## 1. 調査にいたる経過

昭和47年9月に開所した「八雲立つ風土記の丘」は意宇平野周辺に散在する遺跡群の統括的管理を意図したものだが、開所当時はいくつかの代表的な遺跡の調査・整備にとどまり、地内に含まれながらも未指定・未整備の遺跡も少なくなかった。島根県教育委員会ではこのような事情に鑑み、風土記の丘整備構想の一環として地内に所在する遺跡の買上げ、整備を前提とした発掘調査を計画した。調査する遺跡は、早晩消滅する危険性が高いこと、復原整備が可能なこと、学術的にみて調査の意義が大きいこと等を基準とし、昭和48年から3か年実施した出雲国分尼寺跡発掘調査につづく遺跡として岩屋後古墳を選んだ。

岩屋後古墳は古くからその所在について知られていたが、特に明治年間多数の人物埴輪が耕地整理に伴って出土したこと、県下でも最大規模の石棺式石室を内部主体にもつことから広く周知されるにいたり、昭和45年10月に県指定をうけ、周辺の水田を含めた土地買上げがなされた。しかし墳丘の流失、破壊が著しく、またそれに伴って石室上半部が露出し風化が急速に進んできたため早急に整備の必要をせまられていたものである。したがって今回の調査はあくまでも近い将来の復原・整備を前提とし、周辺をも含めた遺跡の保護対策立案のための資料を得ることを目的としており、昭和52年度文化庁文化財保存事業費にかかるものである。

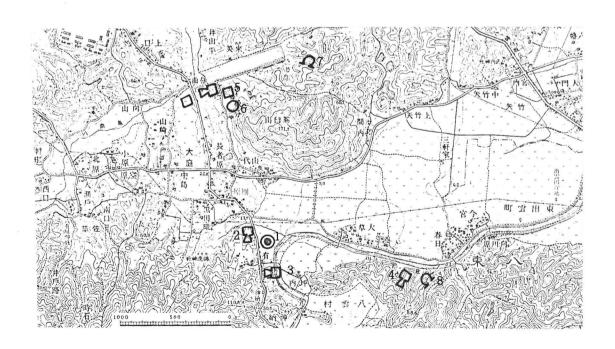
調査は昭和52年10月20日から測量調査に入り、同年12月27日の遺構埋め戻し完了をもって全行程を終了した。その間山本清島根大学名誉教授、町田章奈良国立文化財研究所技官には数回にわたる現地指導をいただき、平野芳英、井上寛光、石飛公士の各氏および地元有志の方々には調査員、補助員、作業員として終始献身的な援助をいただいた。さらに勝部衛出雲玉作資料館学芸員には貴重な休日を裂いての指導をうけ、期間中に開催された日本考古学協会松江大会に出席された先生方からも有益な御教示をえた。今回の調査が当初の目標をほぼ達成し得たのもとのような方々のお力添いの賜と厚く感謝している次第である。

## 2. 周辺の環境

岩屋後古墳(第1図1)が所在する地番は、松江市大草町字岩屋後878番外である。風土記の丘センターのある岡田山丘陵と県道をはさんだ東側の水田中に位置し、北へ向かって流れていた意字川が流路を東へ変換する地点にあたる。明治年間に県道の開通に伴い周辺一帯の耕地整理がなされており、現在は水田中に孤立する本遺跡も当初は低丘陵の麓部に位置していたとみてよかろう。

さて周辺に分布する古墳をみると、古墳時代中期以降の比較的新しい時期の築造にかかるものが圧倒的に多いという事実が指摘できる。中でもいわゆる後期古墳は質・量共に勝れ、古代出雲 文化がこの地で開花したことを知るに十分であり、この地に「八雲立つ風土記の丘」が設置され

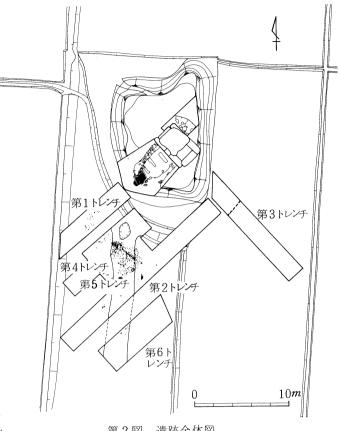
た理由の一つもそとにある。この地に分布する後期古墳は内部主体の様相等からみて3種に大別 できる。1つは本墳をはじめとする石棺式石室をもつ古墳で、他に山代円墳(第1図6)、同方 墳(第1図5)、古天神古墳(第1図4)があげられる。2つはいわゆる横穴式石室をもつ古墳 で、岡田山第1号墳(第1図2)、御碕山古墳(第1図3)がある。そして今1つ墳丘を持たな い横穴墓があげられる。安部谷横穴群(第1図8)、十王免横穴群(第1図7)等その代表格であ る。これらは被葬者階層の限定が現段階では困難な構穴式を除き、いずれもこの地を統治した首長 層の奥津城であることはその規模・副葬品等からして明らかである。しかしその分布状況をみる と1つの素朴な疑問がわく。すなわちそれらのすべてが6世紀後半から7世紀初頭の比較的短か い期間に相ついで築造されたと考えられるにもかかわらず、このように墓制に違いが出るのは何 に起因するのだろうかということである。横穴式石室はいずれも片袖形で自然石あるいは割石を 持ち送り式に小口積みにするといったいわば外来的な要素を強く持つにもかかわらず、墳丘は前 方後方形といった出雲的色彩の濃いものを採用している。また石棺式石室は本墳にみられるよう に切石の1枚石を組み合わせ、玄室平面形を横長にするといった出雲独特の葬風である。と れら両者の顕著な相違は同族者の墓というにはほど遠い印象をうける。しかしそれらの古墳の立 地をみる限りにおいてお互いが対立関係にあったこともうかがえず、彼らの持っていた権力の集 大成としてこの地に出雲国庁・国分寺が造立されたことを考えるならばそれぞれの系譜を探るこ とこそ古代出雲を解明する手がかりになるであろう。



第1図 遺跡の位置と周辺の環境

## 3. 発掘調査の概要

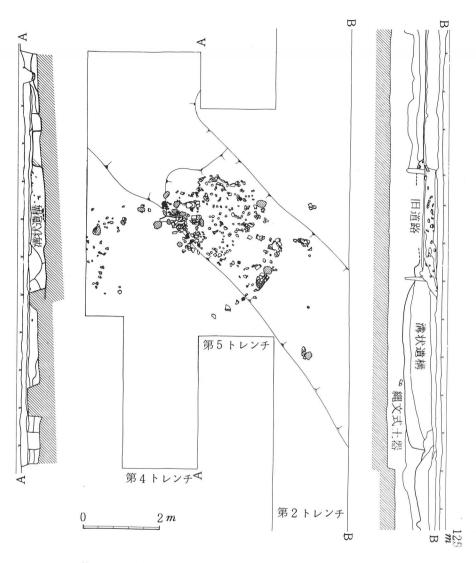
調査は古墳の墳形および規模の確 認、石室構築法の検討を主な目標と した。したがって前者は石室主軸を 基準にしたトレンチによる墳裾部分 の調査、後者は現在露出している石 室につながる羨道部等の状況を全面 発掘により行なった。しかし今回は 県有地部分を調査対象としたために 古墳の南側が主体となり、全貌を把 握するまでにはいたらなかったこと を予め断っておく。また本遺跡の所 在する土地の地目が水田であるため、 調査に際してトレンチ内での湧水が 激しくトレンチ壁の崩壊がひんぱん におこり、また土壌のグライ化によ る色調の変化も強く認められたため、 特に墳裾部分の調査において実態の 把握に手間取ったことを付記しておく。



第2図 遺跡全体図

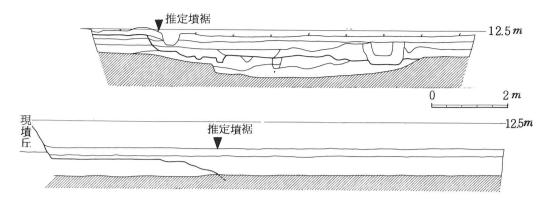
#### (1)墳形・規模の調査

境裾部分の確認がその中心となる。当初石室主軸に平行するトレンチ2本(第1、2トレンチ) 直交するトレンチ1本(第3トレンチ)の計3本を設けたが、第1、2トレンチにおいて遺構・ 遺物の検出が期待できたためその間に第4、5トレンチ、第2トレンチの東側に第6トレンチを 増設して原状の把握につとめた。その結果南北に走る幅 2.5 m、深さ30~60 cmあまりの溝状遺 構を検出した。内部に埴輪片・須恵器片を多量に包含しているものの墳丘中心部に近づくにつれて浅 くなり消滅してしまうことが判明した。流水の痕跡はなく当初古墳の周溝とする考え方が支配的 であった。しかしこの遺構がその東側を並行して走る礫まじりの粘土層と無関係ではないことを 確認した時点で再考を強いられた。礫まじりの層は地元古老および明治 22年の切図の検討により 県道開通以前の道路跡であることが明確になったが、これも溝状遺構と同様現墳丘裾部分で消滅 しており第1トレンチではいずれも確認できなかった。遺構内堆積土は暗褐色を基調とした墳丘 と同質の土で、現墳丘部分を除く周辺の土壌がいずれもグライ化しているのに対して、この部分 での変化は認められなかった。



第3図 遺物出土状況 (図中黒ベタは須恵器、◎は石)

遺物は溝状遺構が消滅するあたり、石室中心部から約12 m南の地点で集中して出土しているものの、完形品はなくいずれも細かく破砕された状態で集積しており、出土レベルも約30 cm位の高低差がある。これらはとうてい原位置を保つものでなく二次堆積の可能性を考えさせる。さらに本来墳丘を飾ったとされる埴輪と、石室内副葬品であってしかるべき須恵器とが混在しているという事実もそのことを裏付ける資料として看過できない。これら遺物は前述のごとく溝状遺構内にその中心をおくが、他に現水田床土粘土層下からもかなり出土しており、その分布状態はほぼ一直線となっている。仮に後世の耕地整理に伴う墳丘破壊の結果の遺物散乱だとすれば、原墳丘内部においてこのような遺物の集積をみるとは考えられず、遺物を中心とした墳丘土の二次堆積は古墳の墳裾より外側であったとしてよかろう。したがって溝状遺構が直接本遺跡に伴わないものであるとの断定が下せれば、石室中心部から約12 m離れた遺物集積地帯を墳裾と推定せ



第4図 第1トレンチ(上)第3トレンチ土層断面図

ざるを得ないであろう。ちなみに十分な調査は不可能であったが、第3トレンチでは断面で見る限りにおいて石室中心から約10 m地点で墳裾部分を確認している。このようにして考察を進めていくと墳丘近くの南側をめぐって流れる用水溝の位置も無視できなくなり、トレンチごとの断面では明確な判断は下せないものの、ほぼ20 m規模の古墳とみてよかろう。しかし地形的にみて当時、より高いレベルにあったと思われる西側部分の調査を実施していない現在全くの推論にすぎず、ましてや墳形についての考察は無意味であろう。いずれにしても周溝の有無も含めた民有地部分の再調査が是非共必要であることを指摘しておく。

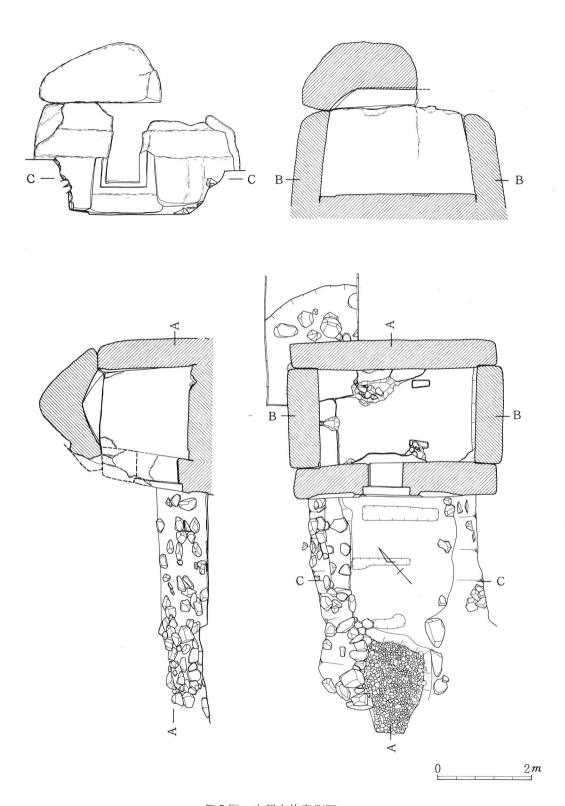
なお水田表面下約1mの青灰色粘土層内から縄文式土器片数点を検出したが、土層が動いた痕跡はなく、古墳築造以前において、当地を含む一帯が縄文時代遺跡であったことを発見した。遺構については不明である。

#### (2)内部主体の調査

岩屋後古墳の内部主体は、現在上半部を露出して遺存する石室の形態から、主軸を南西方向に とった石棺式石室であることは既に周知のことであり、今回の調査の目的はその詳細な構造の検 討にあること、前に述べたとおりである。調査の結果、この石室は奥室・前室の2つの空間の前部 に羨道部をつけたいわゆる複室構造であったことが判明した。しかし前室部・羨道部は後世の破 壊活動により、現在はその痕跡を残すのみである。

奥室平面形は幅 3.3 m、奥行 2 mの横長な長方形を呈する頗る大形のものである。側壁・天井石は各々1枚石で構成されており、床石も同様1枚石と思われるが、現在は数個体に割れている。側壁は平均70 cmの厚さをもち、やや内傾して立てる。その際前後の側壁は、左右のそれをはさむような恰好で置き、接合部分を浅く刳り込んでいる。床石との接合も同様の刳り込みを四側壁につける。これら接合部分に白色粘土を用いて目張りをしていることが、奥壁と床面との接合部、および奥壁と左側壁との接合部外側に残る粘土塊から推測できる。

天井石は最大厚 1.4 m あまりをはかるが現在東側約 3 分の 1 を失なっている。内面は石室主軸 と直交する方向に幅 10 cm程度の平担面をもつ棟の線を刳り込み、平入り四注式の家形天井に加工



第5図 内部主体実測図

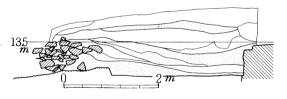
している。床面から棟の線までの高さは 2.3 mをはかる。天井石外側は封土の流失により風化が著しく、原形を留めないもののおそらくその形状から推して内面と同様の家形に加工したものであろう。縄掛け突起の存否については不明である。

床石は前壁および左側壁に沿った部分で破損している。これは後世のものと考えるより築造当時何らかの理由によって割れたものと解すべきであろう。床面中央右寄りの所に2個の方形刳り込みが認められる。右側壁に近い方が若干広がった「八」の字状になっている。いずれも長さ40 cm、幅15 cm、深さ4 cm程度の浅いものである。今その性格について明確に規定し難いが、それらの刳り込みと右側壁との幅が約1.4 mをはかることから考えれば、その空間を遺体安置の場所とすることが妥当である。奥室前壁につけた玄門部が左側に片寄って付けられていることもこれと関係すると思われ、したがって床面の方形刳り込みは遺体安置用の施設(例えば石棺・石床など)の一部であると考えて間違いなかろう。玄門部は上半部を欠失するものの閉塞用の刳り込みをもつしっかりしたものである。幅70 cm、奥行き72 cmをはかり、刳り込みの深さは18 cm である。下面は外側に向かって若干の傾斜をもち、向かって左側の隅に浅い排水溝状の溝が走る。閉塞石は遺存しないが、板石であったと思われる。

奥室裏側の調査によって、石室構築に先立って掘られた墓城を確認した。側壁との幅は約2mをはかり、羨道部までを含む楕円形の掘り方と思われる。奥室、前室といった切石を主体に構築した部分については、墓城との空間を割石によってつめ、裏込めとしている。

前室部は調査前において土砂が堆積していたため、その構造について全く不明であった。調査は石室と同方向の幅4mのトレンチを設定することによりその堀り方を確認し、内部を掘り下げる方法をとった。表土をはいだ段階で奥室前壁付近から羨道部に向かって玄門部をはさんで並行して走る2列の石塊列を検出した。特に左側面におい

て遺存度が良好で、あたかも割石積の側壁を 思わせた。しかし掘り下げるにしたがいそれ 13 は規則性に乏しく、しかも壁面を構成し得な いと判断するにいたって、奥室外で検出した 裏込めと同様のものと判定し、築造当初この



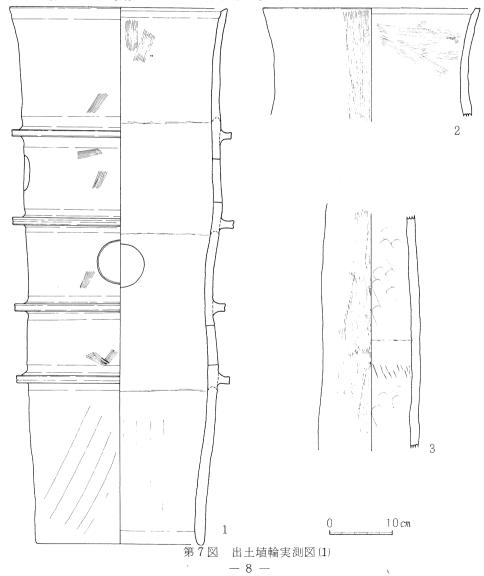
第6図 前室部堆積状況

部分に切石による空間が存在した可能性を考えた。これを裏付ける調査結果として次のようなものもある。まず奥室前壁前面の加工をみると、玄門部両端に幅 20 cm程度の平担面をつけた後、約70 cmの幅で荒く削り取り、未調整のままでおく。また玄門部下端にも同様に未調整の部分が認められる。つまりこの部分は構築後直接目にふれる面ではなかったことを示しており、前室を構成する石材が接する部分であったと考えられる。さらに前室部左側床面はやはり70 cmの幅で一段高くし、扁平割石を埋めこんでいる。これも石材の沈降を防ぐためと理解できる。これらから推測するに、前室はまず床石を置いた後それをはさむような恰好で側石を立て、天井石をおいたものといえる。天井石の架構方法については、奥室上半部の風化が著しいため正確には把めないもの

の、他の例から推して端部を奥室前壁上面に乗せたものと考えてよかろう。

羨道部は側壁を割石によって構成し、床面に川原礫を敷く。右側面および前面は破壊されているため規模等についての詳細は不明だが、現存幅1.2m、長さ2mをはかる。調査開始時この部分に人頭大割石が充填してあるのを確認しており、土層の観察から玄門部の板石によるものと併せてことでも閉塞していたことが明らかになった。

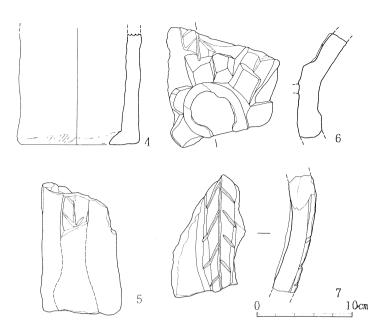
以上内部主体についての復原的考察も含めた調査結果を述べたが、後述する通り本墳はかなり 大規模な破壊活動がなされていたことも判明した。これの具体的事例は前室部堆積土の観察結果 から明らかになった。すなわち堆積土中に石室を構成する石材と同質の石屑層が3層認められた。 第6図中ドットで示した層がそれだがいずれも石室破壊に伴うものと考えられる。上層は玄門破壊面 と同レベル、中層は玄門下面と、下層は前室床石下面とそれぞれ同レベルである。したがって少 なくとも3回にわたる破壊活動が指摘でき、下層を前室部、中層・上層を奥室破壊に伴うものと それぞれ理解したい。時期については全く不明である。



## 4. 出土遺物

#### (1)埴 輪

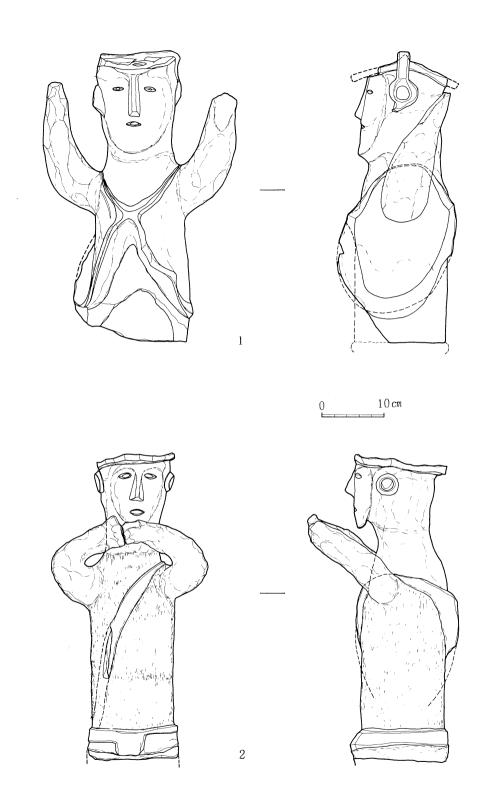
本墳出土の埴輪は円筒 埴輪を主とし、他に形象 埴輪の部分と思われるも のが若干含まれる。以下 出土埴輪の概要を記すこ とにする。円筒埴輪は破 片総数500点を超えるが、 そのうちある程度復原可 能なものは第7図に示し た2点(1、2)を数え



第8図 出土埴輪実測図(2)

るのみである。(1)は総高85 cm、口縁部径34.5 cm、底部径26.8 cmをはかる大形のものである。突帯は4条認められ、いずれも高さ2 cm、幅1 cm前後のかなりしっかりした粘土帯を巻きつけている。突帯断面は基本的には長方形ないし合形を呈すが、その端部は中凹み状になる。上下両側部共になだらかな曲線を描いて撫でつけ、いずれの突帯も若干上向きに接合する傾向が認められる。器体部は表裏共に最下段を除いて刷毛状工具による整形がなされたものと思われるが、現在は風化も手伝って判然としない。最下段は内外面共にナデて仕上げるが、全体にシボリの痕跡が明瞭に残る。全体のプロポーションは部分的に焼き歪みが認められるもののほぼ直線をなし口縁部は若干外反する。端部は内側に若干の傾斜をつける。また底面は丸くおさめる。器体の接合は観察できる範囲内で3か所認められ、いずれも突帯付近で行なわれている。したがって接合と突帯の取りつけは不可分のものであろう。透しは円形を呈し突帯にはさまれた部分に2個ずつ3段に千鳥に配する。胎土、焼成共に良好で明褐色を呈す。(2)は比較的大きく外反する口縁部のみの破片で口径35 cmをはかり、(1)と同様の大形品である。内外共に刷毛状工具による粗い整形痕が残り、刷毛目は表面はタテ方向、内面は斜めに走る。焼成は堅緻で暗赤褐色を呈すが、内面は一部須恵質化している。

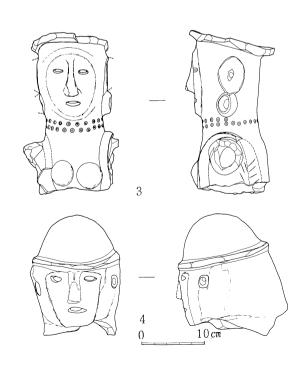
次に形象埴輪はいずれも形態不明な破片のみだが、そのうち円筒形を呈するもの(第7図3、第8図4、5)と曲面の一部を構成すると思われるもの(第8図6、7)とに大別できる。(3)は現在高  $37\,\mathrm{cm}$ 、後  $15\sim16\,\mathrm{cm}$ をはかる円筒で外部装飾は認められない。外面にはタテ方向の刷毛目がうっすらと残るが、内面は斜め方向に粗いナデの痕跡がみえる。また内面中ほどにヘラによる刺突文が認められ、この付近で接合したことが知れる。馬形墳輪等の脚部とも思える。(4)は人物埴輪の基底部と思えるものである。器壁は厚く特に底面は成形時に上からの圧力のためつぶれた



第9図 出土埴輪実測図(3) 東京国立博物館蔵

感じをうける。外面の調整は不明だが一部にかすかな斜沈線が残る。内面は凸凹が激しくかなり雑なナデで調整する。外面底部には櫛状工具でつけたと思われる細い斜沈線が入っており、剝離面と思われるが詳細は不明である。(5)は不整円筒状を呈する埴輪片で、現存長  $13\,\mathrm{cm}$ をはかる。表面に綾杉文を刻んだ帯を付けるが大部分は剝離している。内外共に調整は不明である。同様な帯を付けるものに 6、7がある。(6)は断面厚  $2\,\mathrm{cm}$  あまりをはかる破片で、表面頂部に円形を呈する破面が認められる。それから放射状に綾杉文をつける帯が最低  $2\,\mathrm{am}$  なの形状から人物埴輪の肩の部分あるいは馬形埴輪の臀部と思われる。(7)も綾杉文の帯をつける破片である。帯部は幅  $3.5\,\mathrm{cm}$ 、高さ  $0.5\,\mathrm{cm}$  あまりの比較的しっかりしたものである。

以上が今回の調査で出土した埴輪だが、先に述べたとおり、本墳からは明治年間に出土したと伝える人物埴輪がある。いずれも墳丘の北西裾から出土したとされ、現在東京国立博物館に所蔵されている。とこにその実測図をあげ、概要を記しておきたい。(1)は現存長 47cmの両手をあげる埴輪で、両肩から表裏共に交差する襷をかけている。頭髪は正面像では直線をなすが、側面では山形に表現し、その頂部を両耳にかける帯でおさえている。襷は肩の部分に表現はなく、下方にのびるに従って大きく誇張されている。手は短かく指の表現はない。腰部以下は欠失するも、その部分に腰帯状の凸帯がめぐる。体部全体に指によるナデの痕跡が残り、また部分的に丹が残るところから全体的に丹塗であった可能性も考えられる。胎土に砂粒を若干含むものの良好である。しかし焼成はあまり良くなく軟質である。(2)は現存長49cmをはかる両手を前にまわし何かを捧げる恰好をした埴輪で、襷をけさがけに表現する。頭頂部は中凹みの平担面をなし方形の板を乗せ



第10 図 出土埴輪実測図(4) 東京国立博物館蔵

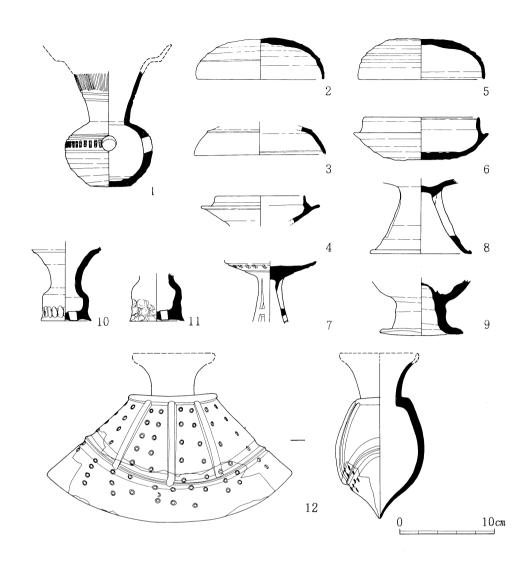
た感じに仕上げる。耳は円筒形で貫通 する。あるいは耳環を表現したものか も知れない。手は顎の高さで手を合わ すものの指の表現はなく、捧物を持っ た形跡も認められない。腰部には前面 で結んだ帯を着用しており種と思われ る。表面の整形は頚部以上をナデ、以 下を粗い刷毛目で行なう。1、2共に 顔面の表情は優しく、鼻が大きい割に 目、口が小さいのが特徴で、特に目は 若干下がり気味につけている。従来い ずれも女性埴輪とされていたが、乳房 の表現がないこと、2については褌状 の帯をしめていることなどから男性と改 めるべきであろう。(3) は現存長25cm をはかる女性埴輪で首に竹管文による

首飾をつける。この首飾は前面では二重になるが背面は一重である。頭部は2と同様中凹みの方形板を乗せる。耳は両方共に失なっているがその下方につけた耳環は旧状をよく留めている。この埴輪も両肩からኞ様のものをかけるが、特に右肩からかけているそれは幅が広く肩布のようにも思える。顔はやはり鼻が大きいが柔和な表情をみせる。(4)は頭部のみ残存する埴輪で高さ19cmをはかる。短かい庇をつけた帽子様のかぶりものを表現している。顔面が小さい割に首が太く若干うつむき加減になりそうである。鼻は欠損している。

以上 4 点はいずれも顔の表情等に類似点がみられ、あるいは同一人物の作にかかるものかも知れない。

#### (2)須恵器

いずれも埴輪片と伴出したもので、層位的な違いもなく混在していた。破片が主で、そのうち 形態の判別出来るものを第11図に示した。 醸(1)は頚部がラッパ状に開くもので、口縁部を欠 く。頚部には2本の沈線を施し、それを境にして上半は雑な櫛目を縦方向に入れる。胴部はほぼ 球形を呈し最大径は中央よりやや上に位置する。径9.2 cmをはかりその部分に単位が5本か らなる櫛状工具による刺突文とその上下に沈線を施す。この文様帯の上から径1.5 cm~1.6 cmの円形の孔を斜め上方から穿つ。調整は文様帯以上はナデ、以下は回転へラケズリによっ ている。底部はロクロから切り離した後、回転ヘラケズリを行なって平担に仕上げる。内面はナ デによって仕上げる。胎土は若干の長石粒を含むが緻密で、焼成は堅緻である。ロクロは右回転。 蓄杯(2~6)のうち蓋はいずれも天井部をヘラケズリで仕上げるもので、□径は14 cm前後をは かる。 (2) は口縁部と天井部との境ににぶい段をつけるもので、全体に丸味をおびている。胎 , 土には長石粒を含み良好だが焼成は悪く灰白色を呈するもろい土器である。(3)は口縁部が大 きく広がるもので、天井部との境にはやはり段をつける。また口縁部内側には浅い沈線を1条入 れ、二段口唇の名残りをとどめている。焼成が悪く、灰白色を呈しもろい。(4)は蓋杯の杯部 あるいは有蓋高林の杯部のようにも思える破片である。復原口径は9.6 cmをはかりやや小形に属 す。立ち上がりは一担内側へのびた後折れて直立する。直立部分の厚さは他の部分と比べて薄く なっている。蓋受部は細く斜め上方に張り出す。体部は浅く直線的でロート状をなす。 (5)、 (6) は以前本墳付近で採集したものである(現在大庭公民館蔵)。(5) はほぼ完形に近いもので 全体的に丸味を帯び、口縁部と天井部との境には上下を凹線によって強調したにぶい突帯が認め られる。また口縁部内面も二段口唇の退化した弱い沈線を1条表現する。天井部外面の回転ヘラ ケズリは頂部にのみ認められる。(6)も同じく採集品であるが、(5)とセットをなすもので はない。立上がりが比較的高くほぼ直立する。口唇部内面には1条の細い沈線が残る。蓋受け部 は上面に若干の丸味をもち、立上がりとの間に凹線状の凹みをつける。底部外面はその大部分を 回転ヘラケズリで仕上げるが、他はすべてナデによる調整を行なう。ロクロ回転は右まわりであ る。胎土・焼成共に良好で暗灰色を呈す。高杯は脚部のみ3タイプ検出されている。(7)は2段 3方に透しが認められる、いわゆる高脚系の高杯で、杯部上半と脚部下半をそれぞれ欠失する。



第11図 出土須恵器実測図

杯部底面には2条の沈線で区画された櫛状工具による刺突文帯がめぐる。透しは上段が三角形、下段は長方形を呈する。杯部がほぼ直立する無蓋高杯であろう。胎土・焼成共に良好でセピア色を呈す。(8)は杯部の大半を欠くもので、三角形の透しを一段二方に穿つものである。脚端部は上方に折り返して仕上げる。杯底部近くにはヘラケズリの痕跡が残るが、他はナデによって調整している。胎土は若干の長石粒を含むが焼成は良好である。灰色を呈す。(9)は全体のプロポーションがダレた感じのもので、杯部上半を欠く。脚部は接合部で5.7 cmをはかるがほぼ垂直にのび、裾部で上字状に屈曲する。杯底部は高く盛り上がり、内面にタタキ痕が残る。全面をナデで仕上げる。胎土は絹ごしをしたと思われる非常に良好なものだが焼成はややもろく灰黄色を呈す。(10)、(11)は子持ち壷の子壷である。(10)は口縁部を欠くが、頚部は細長くラッパ状に開いて口縁部近くで段をなす。おそらく復合口縁的なものになろう。現存器高は7.3 cmを

はかる。胴部はゆるやかにふくらんだ「たまねぎ」状を呈し、底部は本体から剝離したため平担 面になる。(11)は胴部のみの破片である。底面に穿孔があること、本体との接合のために胴部 下半に指頭圧痕が残ること等、(10)と同様である。いずれも胎土、焼成共に良好である。(12) は皮袋形須恵器である。発見当初、口縁部のみを欠くほとんどすべてが破片の状態にはなってい るものの、遺存していることを確認していたが、現場での図面作成の段階で盗難に遇ったもので ある。したがって図示したものは写真および若干残存した破片を合成したものである。それによ ると器高 18 cm、幅 25 cm余りをはかるもので、底部は曲線をなす。肩および胴部中ほどに凸帯を 設け、それをつなぐように3本の凸帯が縦につく。さらに、表面全面を竹管文により飾るが規 則性は認められない。なお、凸帯、竹管文いずれも裏面にはないことを確認しているが詳細は不 明である。調整についても不明である。このような皮袋形を呈する須恵器は全国的にも類例が非 常に少く、したがって時期的にも十分に検討がなされていないものである。しかし現在の所、他 の須恵器と大きな時期差はないものと判断している。

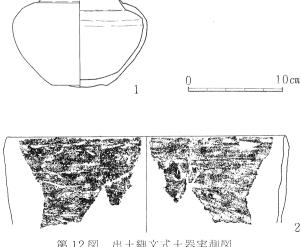
以上今回出土した須恵器を見てきたが、いずれも時期的にみてほぼ同時と考えることができ、 山陰の須恵器編年でいうところの第Ⅲ期、すなわち6世紀後半頃のものとしてよかろう。ただし (9) については若干の疑問を持っていることをつけ加えておく。

#### (3)縄文式土器

いずれも第2トレンチ、溝状遺構下層の青灰色粘土層で検出したものである。(第12図1) は口縁部から上を欠く壷形土器である。内傾気味の頚部は非常に薄いつくりで厚さ 0.1 cmをはか る。胴部との境には凹線状の凹みが巡る。胴部は肩が強く張り、最大径は胴部高の約5分の4の 所にある。底部は一度凹んだ後、再びふくらみ縁辺より外部に突出するため安定は悪い。調整は 頚部にナデが見えるほかは風化が著しく不明といわざるを得ない。胎土に砂粒を多量に含み、焼 成はもろく赤褐色を呈す。薄手なつくりの優品であろう。(第12図2)は平縁の深鉢形土器片で ある。復原口径 29.6 cmをはかる。成形は輪積みによるとみられ、器面の凹凸が著しい。口縁はわ

ずかに内傾し、口唇は尖り気味 になる。 胴部の器厚は 0.3 ~ 0.8 cmをはかる。調整は内外面共に 粗い擦痕が残る。胎土には若干 の砂粒を含み、焼成はややもろ い。暗褐色を呈す。

この他にも縄文式土器片は同 層から若干検出している。いず れも内外に擦痕を残す胴部片で ある。(1)は山陰ではあまり 類例をみない形であり、時期的



第12図 出土縄文式土器実測図

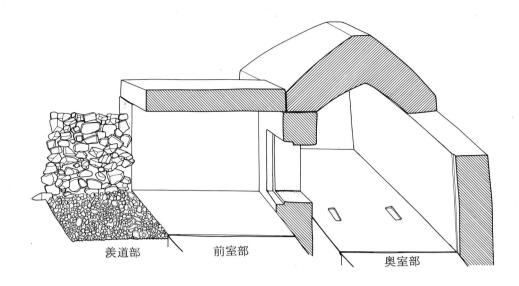
な判別もつきかねるが、(2)は粗製の深鉢で、縄文後期から晩期前半にかけて類例が知られている。 しかし伴出する土器に後期的な要素を持ったものがなく、また晩期後半に出現する凸帯文も見当らない ところから、概ね晩期前半の土器として位置づけられ、当時意宇平野あるいはその後背丘陵を生活の舞 台とした人々の存在が想定できる。なおそれに伴う遺構および他の遺物は全く検出できなかった。

### 5. ま と め

調査の概要で記したとおり、墳形・規模の調査は、墳裾部分の確認が十分に出来ず当初の目標を達成したとはいえない結果に終った。しかし第3トレンチで検出した墳裾と思われる落ち込み、現在の墳丘の南側をめぐって走る浅い用水溝の存在、埴輪を中心とした遺物の出土場所等を総合的に検討した時、20 m前後の規模をもつと考えた。また墳形については全く推定の域を出ないが、他の類似遺跡から推して円墳あるいは方墳の可能性を考えたい。しかしながら古墳へ向かって南北に走っていた道路跡、土壌のグライ化はその確認を予想以上に困難にしており、早い時期での西側を中心にした民有地部分の調査が望まれる。

石室については美道部・前室部・奥室部といった複室構造をもつ整美な石棺式石室であることが判明した。しかし前室部堆積土の断面観察において、最低3回におよぶ盗掘・破壊を経ていることが推定でき、現在わずかに奥室部分が残存するのみである。調査結果をもとに本石室の復原を試みると第13図のようになろう。奥室は床石を置いた後壁面を互いに内傾させて立て、その隙間を白色粘土でふさぎ、内外面共に平入り四注式の家形に加工した天井石を乗せる。床石と側壁および側壁同志の接合にあたっては浅い刳り込みを入れ、隙間があくのを防いでいる。玄門部は奥室前壁の向かってやや左寄りを刳り抜き、さらに閉塞用刳り込みをつける。前室部は奥壁、前壁を除く四面を各1枚の切石で構成し、奥室前壁外側にはそれらとの接合をよくするため荒く削り込むが天井は平天井でその端を奥室前壁上端に架構する。美道部は側壁を割石積とし、床面に川原礫を敷きつめた後、割石による閉塞を行なう。また石室は墳丘を盛った後、墓城を掘り、石室構築と共に墓城との間を割石でつめ、裏込めとしている。さらに前室床面で検出した横3本の浅い溝は石材運搬の際に出来た枕木の跡と思われ、レールを敷いた後修羅状の運搬具で連んだことが考えられる。なお当時の意字川は地形からみて、本墳のすぐ東側を流れていたものと思われ、川を使った石材運搬の可能性が強い。

遺物は墳裾推定部分を中心として、埴輪・須恵器を検出したが、いずれも原位置を保つものとは考えられないところから、古墳の破壊に伴い二次的に集積したものと判断した。須恵器はいずれもその形態から山陰地方須恵器編年のⅢ期に属すと思われ、古墳の築造時期も概ねこの頃と考えてよかろう。また盗難に遭ったが県下初の皮袋形須恵器の出土をみたことも特筆すべきである。埴輪は人物、馬、円筒が確認されているが、特に人物埴輪については挙をかけるという独特な表現方法を用いており、稚拙な中にも素朴な表情をたたえる優品である。今回出土した埴輪のうち



第13 図 石室復原模式図

円筒埴輪は高さ80 cm以上をはかる大形品であるうえに丁寧な作りである。従来埴輪の編年研究は他分野に比べ遅れているとされるものの、本墳出土のそれが古式の様相を具えていることは衆目の一致するところである。本墳とほぼ同年代の築造にかかると思われる岡田山第1号墳出土の埴輪もしかりである。これらのことから出雲における埴輪は他地域(特に西日本において)に比べ、かなり時代が下るまで伝統的手法を受けついできたとしてよかろう。

以上調査の結果を若干の私見も加えて述べてきた。いずれにしても本墳を含めて石棺式石室のもつ問題点は多岐にわたり、その解明には今少しの時間を必要とする。今後は石材鑑定も含めた総合的な形態分類、同時期墳墓との比較検討などの作業を経てはじめて出雲古墳文化の中での正当な位置付けが可能であることを指摘しておきたい。



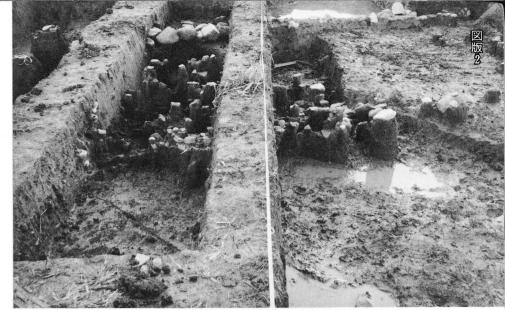
遺 跡 遠 景 (西から)



調査前の墳丘と 石室(南から)



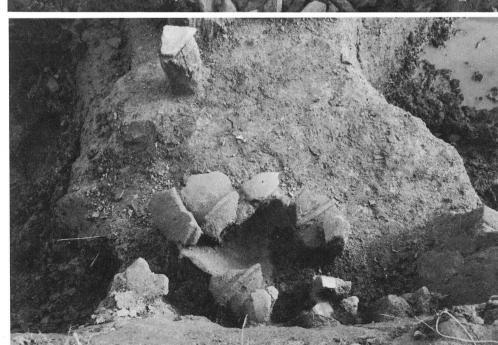
調査前の墳裾部 分(第2トレン チ、北から)



遺物出土状況 (第4、5トレ ンチ、北から)



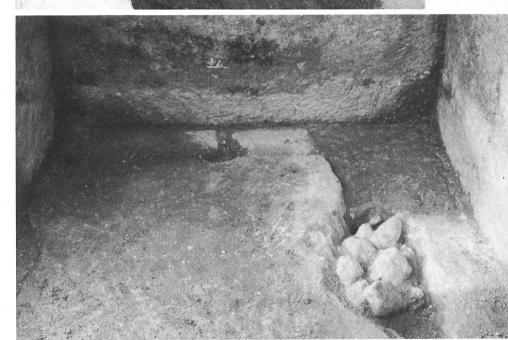
遺物出土状況 (第4トレンチ)



遺物出土状況 (第2トレンチ)



奥室内堆積土の 状況(東から)



奥室内床面(西半部)



奥室内床面(東半部)



奥室天井石の加 エ



奥室内側壁結合 の状況(奥壁と 東側壁)



石室掘り方の線 と裏込め石



奥室外側の粘土 による目張りの 状況



奥室前壁前面の 加工(西半部)



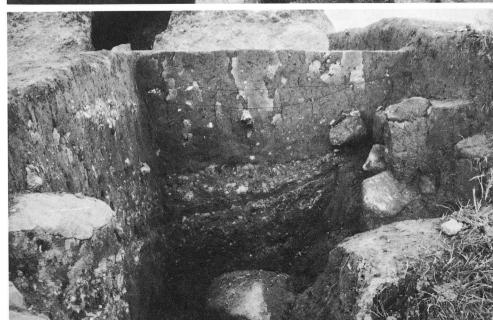
奥室前壁前面の 加工(東半部)



前室・羨道部調 査直後の状況



前室堆積土の状 況(上層の石屑 層)



前室堆積土の状 況(白っぽい層 が石屑層)



調査後の石室

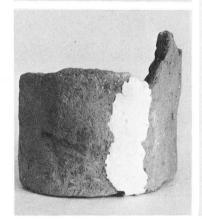


調査後の前室・ 羨道部



調査後の羨道部 の状況







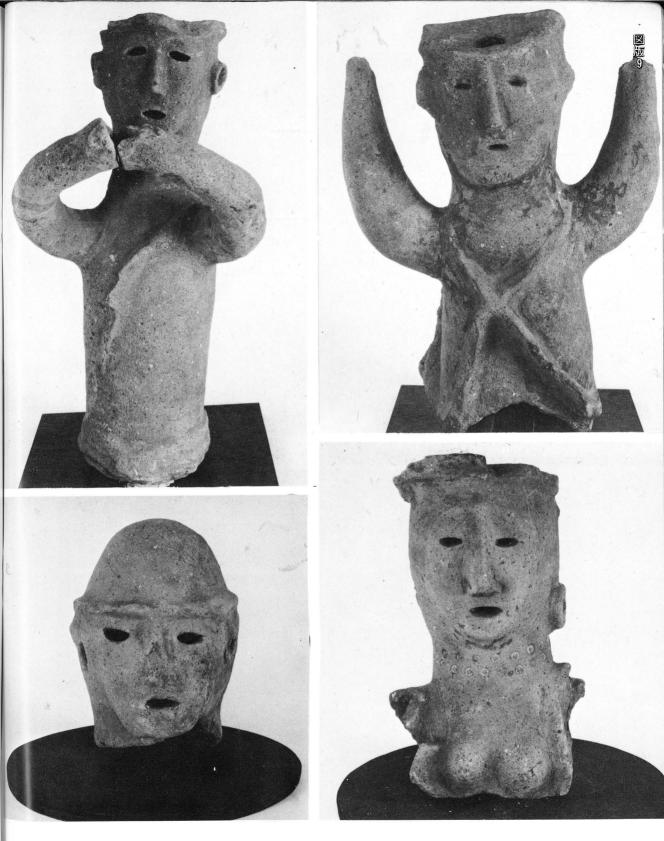
出土遺物 1 <u>7 図 3</u> 7 8 図 4 7 図 1



8 | 8 | 8  $\boxtimes$  |  $\boxtimes$  |  $\boxtimes$ 6 | 7 | 5

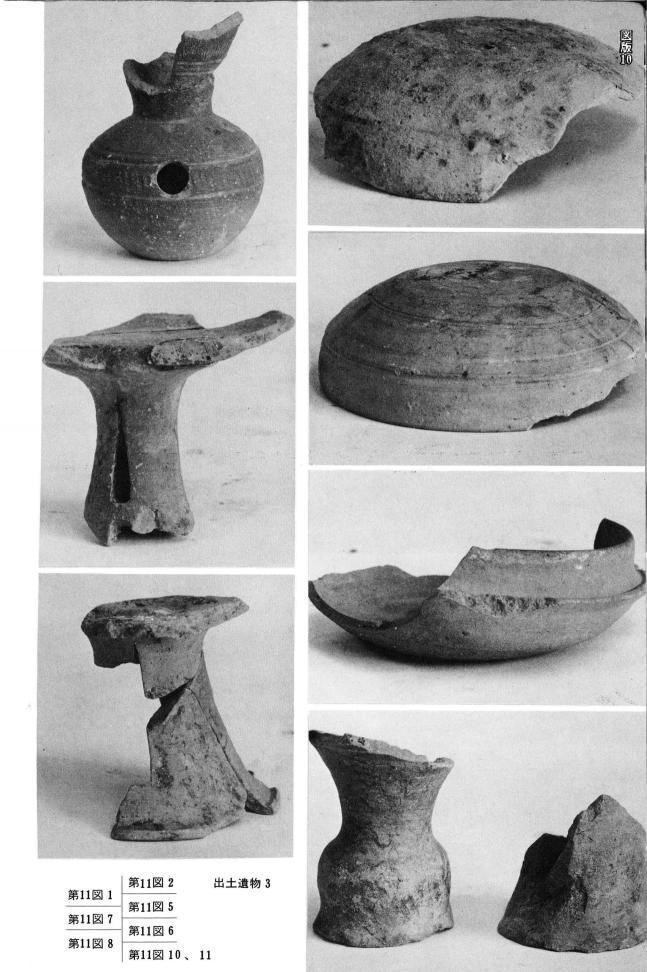






出土遺物 2 (東京国立博物館蔵)

<b>育</b> <b>2</b>	第 9 図 1
育 0 1	第 10 図 3



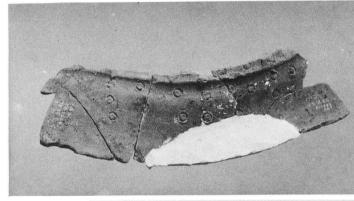


第11図 12

上 出土状況

下 残存部分

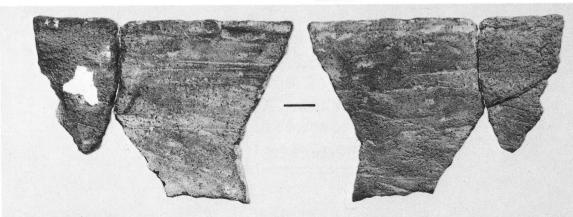
出土遺物 4



第12図 1

第12図 2 (右、表面)





# 岩屋後古墳発掘調査概報

昭和53年3月20日発行

編集·発行 島根県教育委員会文化課 松江市殿町1番地

印 刷 株式会社 報 光 社 平田市平田町993